

三
人
旅

か 遠 む
わ い か
い 銀 し
そ 河 む
う の か
な 彼 し
サ 方
ラ で
リ 起
ー こ
マ っ
ン た
の
物
語

脳味噌と言わなければ味噌の味はするはずで高品質の
 パク質だから食料としては食べれば味噌の味がするわけだ。ネアン
 ター人が滅びたのはクロマニヨン人がネアンデルタール人を狩
 り殺してその脳髓を食料にしていたからではないのか。そのうち
 アンデルター人がいなくなっていたクロマニヨン人は絶滅してしま
 うと脳が
 食べなければ共食いをするし、穀物が発酵して偶然味噌にな
 いう生存本能が働いて、蓄えていた穀物が発酵して味噌にな
 てそれが同じ味だといふので代用品として今味噌の語源は脳味噌
 明されたに違いない。きつとそうだとすれば味噌の語源は脳味噌
 にあるわけだ。今までもだれも気がついていない。現実逃避の思
 新発見だ。今までもだれも気がついていない。現実逃避の思
 発見を自慢する相手もない。それがどこかにない。現実逃避の思
 を続けていれば誰か話す前に自分がおどろかぬない。現実とい
 つと自分の現実をしっか直視しなればいけな。その現実とい
 うのは。

「もう少し安定できないのかよ」
 「無理だ。風が強すぎるんだ」
 「ちくしょう」

俺は口の中で小さくのしつた。
 頭上約十五メートルには俺をケーブルでつるしているヘリコプタ

「がホバリングしてその位置を何とかして保とうとしている。眼下には救助を待っている小さな救命ボートが五メートルから十メートルの間の高さで波に揺られて激しく上下している。風も強いし波も激しい。さっきから何回もボートの上の人間をとらえようとして手を差し出してみるが、いつもわずかの差で確保することができない。二回波頭につっこんですでに全身がずぶぬれになって、ヘリコプターのローターからの強い風と低気圧の起こす風が重なって急激に体温が下がっていくのが自分ではつきりわかる。」

「あと三メートル、ケールブルを出してくれ。次の波をねらう」

「五分しかないぞ。上空の支援機から接近警報が出ている」

「とにかく次の波でやる」

「了解」

ケールブルが急激に出されて、体が一気に降下した。そのとたんにケールブルが共振を始めて先端にぶら下がっている俺は大きく激しく振り回され始めた。これでは目標に接近できても捕捉できない。自分の位置を視野で確かめるための固定した点がどこにもないので急に気分が悪くなってもどしそうになった。それを我慢して、ケールブルの振動を利用して何とかボートの上の人間に手が届きそうになつたその瞬間に上から怒鳴り声があった。離脱する」

「無茶言うな。俺を引き上げてからにしてくれ」
「しかし言い終わる前にヘリコプターは機首を転じて旋回運動には
いった。俺は反対方向に振り回され、ケーブルから振り落とされて
頭から海につつこんだ。」
水面に激突した衝撃は想像以上にひどかった。それに輪をかけて
水温が非常に低い。さらにまじいこと、自分が落ちたときの姿勢
がわからなかった。水中に沈んでからどの方向が上つまり水面な
のか方向がわからなくなっていた。わずかに息をはいてその泡が移
動する方向を確認してから水面に向けて泳いだ。
水面から顔を出して周囲を見渡したが、ゴムボートもヘリコプタ
ーも見あたらない。波のうねりが激しくて頭から何回も潮水をかぶ
った。後ろから声があった。
「こっちだよ。泳いでこい」
振り向くと波の重なる山の間、ゴムボートの上の人物がかるうじ
て確認できた。体にまとわりつく衣服の重みを何とかして克服して
ゴムボートにたどり着いた。
「あがつていいか」
「当たり前だ。早くしろ。この水温じゃ五分で死ぬぞ」
「必死にボートの上にはいずり上がった。大きく息をついてからあ
らためて体の寒さに気がついて震えた。日が暮れかかっているからあ

「下がりは始めている。最悪の夜になりそうだ。」

「へりはどうなった」

「南東一キロくらいのところ。生存者はいないと思う」

「思わずため息が出た。」

「俺はついていてるな。ケーブルでつられたまま焼き上げられなくて

済んだ」

「彼が不愉快そうな顔をしたのがわかった。」

「よくそういうせりふが出るな。同僚だろ」

「あんなやつら同僚じゃない」

「彼はおやという表情をしてから口を開いた。」

「そういえば何であんたはレスキューチームのドライスーツを着て

いないんだ」

「サイズがないんだとよ。臨時雇いの俺にドライスーツ作っている

ような予算はないんだと。ひとを消耗品扱いしやがって、ざまあみ

ろ」

「ひよつとしてあんたは出向か」

「そうだよ。今は第八師団のレスキューチームに無理矢理入れられ

ているけれどね。やりたくてやっている仕事じゃない」

「噂だけだと思っただけだ。出向で前線に出ている人もいるん

だな」

「俺のことはどうでもいいよ。あんたの身元を確認したい。あんた
Aチームのエースの木村さんだな」
「そう呼ばれているんだがな。ちゃんとした所属と階級はあるのに
その通称が宣伝されているんだ。自分ではいやなんだけれどね」
「階級で言えばあんたに敬礼しないといけないんだろがね。任官
もされてくないし、出向辞令も出ていないままなんだ。多少の無礼
は見逃してくれ」
「わかったよ。無理もないからね。ところでもうだれも助けには来
ないだろうな」
「すでに周囲は暗くなりかけている。濡れた衣服が体温を奪い始め
ている。」
「救助ヘリがすでに一機墜落されているからな。それに発信機の電
波は到着の十分前に途絶えていた。いくらエースの木村でもこれ以
上損害を出してまで救助活動はできないだろうからね」
「ヘリのパイロットは最後の発信機的位置を頼りに、低空飛行で何
とかしてこのゴムボートを発見した。そんなことをせずに発信機の
電波が途絶えた時点で救助活動を中止すればよかつたのだ。そうす
ればみんな助かったはずで俺もこのようなずぶぬれの最悪の状態に
ならず済んだのだ。」
「沿岸警備隊は来ないかな」

「あそこは中立非介入宣言をしているからたとえ墜落の事実を知つていても戦時の遭難の救助活動はしないだろうね。一方を敵に回すようなことはしないよ。それにこう暗くなったら目視で探索なんてできないと思う」

「今夜がやまか。しかし明日になってもこのままずっと流されてい
るんじや生き残るあてはないか」

「なんとか本土にたどり着くさ。救出命令はまだ解除されていない
んだから、やるべきことはするよ。寒くなってきたな。保温シート
がサバイバルキットの中にはいつていないか」

「あるよ。サイズは一人用だけれどないよりましだ」

俺と木村は保温シートを頭からかぶって海に浮かぶ銀色の亀のよ
うな有様になった。

俺はズボンの後ろのポケットから携帯用のバーボンのビンを取り
出して一口飲んでから木村に勧めてみた。

「何でそんなものを持っていくんだよ」

「いいじゃないか。体が温まるぜ」

「そうだな。しかしこの状況だと眠ったら最後だ」

「たばこもあるんだけれどね。こんなものかぶっていたんじやたば
こを吸うなんて無理だろうな」

「それはどこかの地面に足が着いてからにしてくれないか」

「わかったよ」
俺はジャケットの内ポケットから防水型の携帯ラジオを取り出し
て壊れていないのを確かめてから、二つの放送の内容をチェックして
てみた。あとめると同じだ。二機編隊の支援戦闘機が橋を攻撃して
落としたりあと迎撃に向かった多用途戦闘機と空中戦になって双方墜
落して全滅。橋は修復の見込みなし。まるで天気予報の説明のよう
な形式通りのナレーションで明日になり必要最小限の報道しかしない。
一方テレビはテレビで紹介やらがあつて、搭乗員の家族なんとい
説やら戦闘機の搭乗員の紹介やらがあつて、搭乗員の家族なんとい
うのが出てきて涙の記者会見をしたりするのだ。レスキューチーム
が二重遭難したなんて裏方の話題は受けがよくないのできっと無視
されるに決まつている。このままじゃ犬死にだ。
「木村さん。どうやらあんたはとうとう伝説の人になっちまったら
しいぜ」
「そんなことどうでもいいことだ。俺とは関係のない次元の馬鹿騒
ぎだからね。生き延びる方が先決だ」
「バーボンをもう一回口に含んでから俺はため息をついた。
「たしかにそうなんだ。見せ物とね。今やっっているこの戦争はある意味
では見せ物なんだ。見せ物という言い方が悪ければ、テレビのバラ
イティ番組やスポーツの中継と同じなんだよ。知らないだろうか

ら教えてやるけれどね、あんたの今回の任務は全部実況中継されて
いたんだよ」

「まさかそんなことはないだろ。今回は極秘作戦だったはずだ」

「ところがそれがどうやらリークされていて、あんたともう一機の
戦闘機が低空で進入してくるところもミサイルを発射してから離脱
するところも、橋が落ちるところも全部リアルタイムでテレビ中継
されていたんだ。知らなかったのはあんたともう一人のパイロット
だけだったんじゃないかな。基地のみんなまでテレビで見てたよ。カ
ット割りがかうまくてまるで特撮映画でも見ているような具合だっ
た。それをスローモーションで何回も再生してなんだかメディアの
演出がこの頃はだんだんエスカレートしているみたいだぜ」

「たまらんなあ。こっちは命がけで任務を遂行しているのに。あ
いは自分が犠牲になって相手の二機と刺し違えたんだよ」

物好きもいるものだ。
「今日の中継は、あんたの顔写真も以前撮ったインタビューのビデ
オも流していた。あいつらテレビに顔を出す人間はタレントだろう
が犯罪者だろうが全部同じ有名人で同列の扱いにしゃがる」

「心当たりはあるよ。基地から基地への異動命令が出るとそのたび
に基地のゲートの前でカメラやら色紙やら持った女子供や変態の中
年男がつきまとって、サインくださいだの一緒に写真撮ってくださいさ

いだの握手してくださいだの、うるさくつきまとうんだ。非番でも外出もできないんだ。かなわないよ」

「追っかけてっていうやつだ。メディアに顔を出している人間だったら相手が何をしている人間かは関係ないんだろう」

「上の方から言われたよ。俺は今やこっち側の主役の一人なんだから人前ではせいぜい愛想良くしろだとき。広報活動なら専門の部門があるのに。何だか俺のキャリア全部をおもちやにされているみたいで情けないよ」

俺は木村にバーボンを勧めた。木村は大きく一口あおった。

「爆撃には今まで何回出た。今回のも含めて」

「四回だね。高速道路、車両ターミナル、兵舎になっている団地、それに今回の橋だ」

「共通していることに気がつかないか」

「何かな。公共施設というくらいしか思いつかないが」

「もっとも具体的なことで奇妙なことがあるんだ。わからないかな」

「そういう思考は苦手なんだよ」

「今日橋を攻撃したときに、橋の上に自動車や人影があったか。それとあの橋は下の層に鉄道の線路があるが列車は見なかったか。それと、そういうえば攻撃目標はいつも無人だったな。偶然にしてはおかし」

俺は少しばかり木村のナイーブさにあきれた。

「みんな知っていることなんだけれどね、どちらの側の作戦もあらかじめ日時と場所は地元の警察に通知しているんだ。避難勧告が出て民間に被害が生じる危険がなくなったら警察から司令部にゴーサインが出る」

「なんだよ。それじゃこの戦争はなれ合いか」

「当事者としては現実に殺し合っているんだからなれ合いじゃないかな」
「見物人にとっては現実にはテレビの中のフィクションと同じじゃないかな」

「馬鹿にした話だ」
木村は本気で腹を立てているようだ。

「俺たちはどこに流されていくのかな」

「わからないよ。このまま北の海まで流されていくのかそれとも隣の国にたどり着くことになるのか。ただ水温が高くないから潮流に乗ってしまったりわけてはならない」

「敵地に流れ着いたら帰れないな」

「木村さん。あんたは確かに戦闘機乗りとしては一流だが戦争全体を見ていないな。敵地なんでものは存在しないんだ。この国全体で敵味方だんだら模様に入り乱れていて前線なんでものがないおかしな戦争なんだよ。年中いろいろな組織が寝返っている。勢力図も描

けないんだ。今週の勢力図が今日の勢力図になってそれでも間に合
わなくなつてた。いま現在の勢力図になつてゐる」

「こんなおかしな状況は教わつたことがないよ」

「おれだつてこんな形で戦争が始まるなんて思つてもいなかつた」
「ひよつとしたらたとえ助かつたとしても、木村は空のエースだか
らどちらの側について、厚遇されるだろうが、俺はただの出向の裏
方の使い捨てだ。下手をして同業他社に捕まったら木村だけ生かさ
れて俺は処分されてしまふだろう。木村を原隊に復帰させることが
今の最優先の仕事で、その役目を果たしたら俺はそれなりの扱いを
してくれるかも知れない。木村は俺にとつての保険だ。せいぜい大
事にしよう。」

想像を絶する一夜があけて、東の空が白んできた。

水平線を見ていた木村が声を上げた。

「陸が見える。本土だといんだが」

俺は木村の指さした方向を見ても何もわからなかつた。飛行機乗
りは視力が命だというのには本当らしい。

「木村さん。このあたりの地図持っているかい」

「作戦用の戦域図ならあるよ」

木村が折り畳んだ地図を飛行服の内側から取り出して俺によこし

た。俺は左腕にまいた腕時計型のGPSをチェックしてみた。ライ
トが壊れている。肝心の時に基本的な機能がぶっ壊れるというの
はどういうことだ。

「暗くて見えない。ライト持っていないか」

「あるよ。それで何がわかるんだ」

「緯度と経度がわかる。方位と気圧と高度と温度と湿度もわかる。
月齢もわかるし天気予報もできるよ。血圧と脈拍と血糖値もわかる。
体重と脂肪率もわかる。ストップウォッチにもなるしタイマーにも
なる。ああそれから曜日と日付と時刻がわかる」

「現在位置はどこなんだ」

「緯度と経度は読めるんだが、それがこの地図のどこになるのかわ
からない。この地図はどうなっているんだ」

「これは向きが反対だ。数字を言ってくれ」

俺はGPSから数字を読みとって木村に教えた。

「俺たちのいる場所はここだな。するとあれはこの島だ。島までは
四キロ。本土まで二十キロというところか」

「とりあえずあの島に上陸するしかないな」

「オールがないんだ」

「手でこぐしかないだろ」

「そうだな」

海流に乗りながら二人で両手をオールの代わりにしてゴムボートを漕いでいく。いやなことにはふと気がついた。

「このあたりの海には鮫がいるんだぜ」

「いやだな。こんなところでジョーズのパロディなんかしたくないよ」

「あと半分くらいじゃないかな。上陸できる場所がなかったりして」

「どうしてそう悲観的なことばかり言うんだよ」

「最悪の予想を前提にしていればたいいの事態には楽観的に考えられる。すまないが営業マン時代からの習慣なんだ」

島に小さな入り江があつて、そこから上陸することができた。ゴムボートは引き上げて茂みの中に隠して、搭載してあつたサバイバルキットは木村と俺で分担して身につけることにした。

「それじゃ一服させてもらうかな」

俺は救急治療用品の空き缶の封を開けて、中からたばことライターを取り出した。

「そんなにしてまでたばこが吸いたいのか」

木村があきれている。

「たばこがないと生きていけない人間なんだよ。見逃してくれ」

一本口にくわえて火をつけた。思い切り吸い込んでようやく一息ついた。

「とりあえず陸地に上がったけれどこれからどうするか。何とかして本土に渡る手段を見つけないと下手したら飢え死にだ」

「信号弾なら使わなかったからまだあるよ。探索用の飛行機でも上空を通過したら目印に打ち上げればいい」

「味方の航空機かどうかどうやって区別するんだよ」

「そうか識別マークも最近はあるてにならないからな」

「何だか地上に降りた飛行機乗りというのには楽観主義の固まりで脳天気だという気がしてきた」

「この島は人は住んでいないのかな。電話でもあれば基地に連絡できるんだが」

「地図には補給施設なしの印がついている。きっと無人島だろ」

「輸送手段がないとあのゴムボートで本土にわたるはめになるぞ。たったここまでの間でも腕がぱんぱんに腫れ上がっているのこれ以上こげつていうのか。俺はいやだね」

「責任を持つて基地に送り届けるんじゃないやなかつたのか」

「わかっているよ。わかっているけれど肉体の限界は克服できるもんじゃない。少し休ませてくれ」

「あんたに身の安全を任せるのが不安になってきた」

「しかたがないだろ。素人なんだから」

「すぐ居直るんだな」

「そのとおり」
勝手に一時間休息した。空腹がひどいのだが木村の非常食を分け
てくれと言うわけにもいかない。
「それじゃ島の中を見物してみるか。何か役に立つものが見つかる
かも知れない」
本心は食べられるものが欲しいのだ。
島の周囲は約五キロで標高の一番高いところでも二百メートルに
もならない。上陸した入り江と反対側の地点の岸辺に廃屋が数軒並
んでいるのを見つけた。
「人が住んでいる様子はないな」
「これはかなり昔に放棄されたんじゃないかな。この戦争よりもず
つと前だろ」
「せめて船でもあればなあ」
「そんなに都合のいいことなんかあるはずがない」
三軒の半分倒れかかった家の中を捜し回ったが電話などはもちろ
んなく、ようやく見つけた缶詰も賞味期限をとつくの大昔に過ぎた
ものだけだった。悔しいから火をつけてやろうかと思つたがそれも
馬鹿馬鹿しい。井戸も枯れている。真水があれば潮漬けになつてご
わごわべとべとになつた服を洗うことができるのに。
「島の内部にはいつてみよう」

「好きなようにしてくれ。どこにでもついていくよ」
「本当はかなりへたばっているのだが、実は置き去りにされるのが
怖いのだ。」
小高い丘を越えたところで木村が立ち止まった。
「おい。あれは機関銃座じゃないのかな。つい最近まで人がいたん
だよ」
木村が茂みに半分埋もれている金属部品の固まりのようなものに
近づこうとした。その時いやな感じがしてとっさに声を出した。
「ちよつと待った。やたらと近づかない方がいいぜ」
木村は立ち止まって俺の方に振り返った。
「何だよ。何か気になることでもあるのか」
「よく観察してみなよ。その真ん中のぶっといパイプが銃身だとし
たら、それはどこに向いている」
「えーと、向かいの山の中腹だな」
「そこに建物かそれとも道路はあるか」
「何もないよ。林だけだ」
「それならその銃身は何を狙っていることになる」
「わからん」
「それにその機関銃の背後」
「何も無いよ。急な斜面があるだけだ」

「それならその銃座は何を守るためにあるんだ」

「わからない」

俺は木村に近寄った。

「ワイヤーケーブルがあつたよな。貸してくれ」

「いいよ。けれど何に使うんだ」

「俺の勘が正しいかどうか確かめてみる」

俺は受け取ったワイヤーの先端を小さな輪にしてそのさびかけた金属の固まりの一方所に掛けた。ワイヤーを繰り出しながらゆっくり

後退していく。

「そのくぼみに隠れてくれ」

「何が始まる」

「勘が当たったら今よりもひどい状況になる。頭を守って伏せてい

てくれ」

木村の隣に潜んで呼吸を整えた。

「一、二の三」

ワイヤーを引っ張ったとたんに爆発音がして機関銃が吹っ飛んだ。石やら木の枝やら機械の部品やらがあたりを飛び散った。

俺はくぼみから顔を出して確認してからため息をついた。

「今のは何だったんだ」

「ブービートラップっていうやつさ。撤退するときの置きみやげに

爆弾を仕掛けておくんだ」

「そんなことよく知ってるな」

「一夜漬けで勉強したんだよ」

「どちらかの部隊がつい最近までここにいたということか」

「そうだよ。まだいるかも知れない」

「その通り。おっとこちらを向いたら撃つぜ。ゆっくり両手を頭の

上に上げてくれ」

後ろから声がした。危険を感じたのでその声の言うとおりにした。

「四ヶ月ぶりですよやく人間に会った。敵か味方かわからないんで

ね、所属と階級を言ってくれ。そっちの大きい人」

「第八航空師団で仕事をしているが階級はない」

「階級がないだと？そんな馬鹿なことがあるか」

「強いて言うなら三之宮興産中西部支店営業本部営業第二課第一係

長心得だよ」

「何のことだよ」

木村が助け船を出した。

「聞いたことがないかな。この人は出向できてきているんだ」

「出向だと？噂だけじゃなかったのか。初めて見るよ」

「民間人だけれど非戦闘員だなんて言い訳はしないよ。レスキュー

チームで仕事をしていたのは事実だからね」

「それじゃこっちの飛行服の人は」
木村が名乗る前に手取り早く話してしまった。
「Aチームのエースの木村さんだよ。知っているだろ」
「その呼び方はいやだつて言ったのに」木村がぼそつとつぶやいた。
「木村さんか。こっちに向いて顔を見せてくれないか」
木村が男の方に振り向いた。
「その顔はテレビで見たことがあるね。すまなかった。手を降ろしてくれ。そっちの人も楽しんでいいよ。なんだ、二人ともこっち側の所属じゃないか」
こういう単純な発想の人間は扱うのが楽でいい。へんに鎌を掛けたりしないのでよかった。味方なら情報とできればある程度の物資の補給ができるし敵ならばおとなしく捕虜になるしかないのだ。嘘をついてあとでばれたらかえってとんでもないことになる。もつとも他にひどい状況はいくらでも考えられて、独立派と称する何か勘違いした人だったらどちらでも敵だと言うだろうしもつとひどいのは純粋の趣味で個人的にこの戦争に参加して人殺しを楽しむような種類の人間がいるというのだ。
「四ヶ月って言ったな。部隊は撤収しているんなら何で一人だけ残っている」
「戦況の展開によってはこの島が鍵になるって聞かされてね。戻っ

てくるまでここで踏みとどまってくれって言われている。俺の専門はゲリラ戦でね。この島くらいなら一人で十分守れる。ああ俺、鈴木。よろしく」

自分だけ階級を名乗らないというのは不公平だ。きっとやましいことがあるに違いない。

「でもあのブービートラップを見破られたじゃないか」

「あれはあれでいい。比較的簡単な罠だからね。素人にしてはよく見破ったけれど。あれで油断したら次はもっとややこしいやつが仕掛けてある」

木村が重大な問題だと言いたげに発言した。

「四ヶ月いるんならこの島のことは詳しいと思うんだけど、どこかに真水の出るところないかな。飛行服が潮気を吸ってから乾いて何だかおかしい具合なんだ。洗濯したいんだけど」

「泉とか井戸とかはない。雨水は飲料水に使っているから洗濯する余裕なんてないよ」

そうだろうなと言いたげに木村がため息をついた。

「どこかで休める場所はないかな。体は冷え切っているし腕の筋肉はへたばっているし島中歩き回って疲れた。休んでこれからどうするか考えたんだけど」

「近くにアジトのひとつがある。一緒に来るか」

「ああ頼む」
「近くというのに二キロ近く歩かされた。」
「狭いのがまんしてくれ。そもそも俺一人だけのものだからね」
「狭いのは昨日からだからもう馴れた。たばこ吸っていいかな」
「たばこがあるのか。一本もらえたらいいんだけど煙は目立つかな」
「俺はずっと気になっていたことを初めて口にした。」
「目立つのも何も誰も見ていないよ。気がつかないのかな。飛行機も船も全然見えないだろ。このあたりは海域も空域も封鎖されているんだ」
「え？いつからだ」
「二ヶ月前だったかな。このあたりは公海に近すぎるっていうんでお互いにここでの部隊の展開はしない取り決めになったんだ。そもそもはお隣の国の圧力なんだが、戦争するのならば自分の国の中でやれちよつとでもこっちの方にはみ出したら敵対行為と見なして自衛の手段を選ぶって警告されたんだそうだ」
「それならあんた方はどうしてここにいるんだ」
「木村が口を開いた。」
「作戦遂行のあと北に向かって逃げるしかなかったんだ。あれ以上飛んでたら隣の国がスクランブルかけていただろうな」

「それで撃墜された木村さんを海上で拾い上げようとして俺も落っこちた。たまたま流れ着いたのがこの島だっていうだけだ」

「封鎖されてるってそれならどうしてそのことの連絡が入らないんだ。二ヶ月も前のことだろ」

俺は気になつていたことを確かめたかった。

「あんたの所属はどこなんだ」

「第十三連隊だよ」

「それでわかった」

「何がだよ」

「第十三連隊はトレードされたんだ」

「なんだそのトレードっていうのは」

「本土にいる第十三連隊とむこうの第七連隊がちょうどお互いに相手の勢力圏の中で孤立したんだ。互いに戦線を突破して陣形を立て直すには予想される犠牲があまりに大きいつていうんでそれなら取りかえっこして勢力範囲を単純明快にしようつて話し合いで決まったりらしい。あんたどうする。最初の命令を前提にすれば俺たちは同じ側ということになるんだが、命令を出したもとがあっちがわになつたとすると俺たちにはあんたの敵ということになるのかな」

「そんな変な話があるか。第一証拠がない」

「それなら無線機で確認してみなよ。多分通じない」

「無線の使用は非常事態以外は禁じられている」

「あんたにとつては今がその非常事態だと思ふんだがね」

「わかったよ」
彼は無線機を出していくつかの周波数で交信をモニターしていた。

「だめだ。どの周波数でも関係ない話ばかりしている。第十三連隊の本部も出ない」

「ケータイは？」

「持つてるけどあれは一発で居場所がばれるから軍事作戦になんか使えないんだよ。あんたも持つても使わないでくれよな」

彼はそう言い切つてから大きくため息をついた。

「かわいそうにな。担当が換わつて引き継ぎでミスがあつたのか、あんたの存在は忘れられたんだろうな。それとも」

「何だ」

「島流しにされた。民間会社なら左遷ともいう」

「こんな馬鹿馬鹿しい話は聞いたことがない」

「これからどうする。どちら側についても理屈は通るよ。それともずつとここにいるか」

「直属の上官の直接口頭による命令解除がない限り、ここを死守する任務があるって言えばかつこいいのかもしれないけれどなあ。俺

だけ置き去りにして寝返るようなことをされて黙ってついていく気にもならない。やる気なくしたよ。あー馬鹿馬鹿しい」

「だ。あんたなんかまだいい方だ、などと云ったら殴られそうな雰囲気だ。どうりで補給もなくなるわけだ。二週間に一回航空機で投下していた便もこのところ全然来ないからおかしいとは思っていたんだけどね。食料食いつないでいたんだけれどそれもなくなって、最近はウサギやネズミの干し肉しか口にしていけない」

俺は黙ってたばこを一本差し出した。彼は深々と吸い込んで気持ちよさそうに煙を噴きだした。また木村がいやな顔をする。

「提案があるんだけどね」

「提案だと？」

「あんたにも悪い話じゃないと思う。意味のなくなった命令にしがみつくよりましだと思うよ」

「内容による」

「俺はまだ木村さんを基地まで送り届けるつもりでいる。生き延びるにはそれしか手段がないからね。ただ俺一人じゃ無理だ。兵隊と口のアんたがいかしなないでいきなり現場に出された素人だもの。木村さ

んを連れて帰ったらあんたも歓迎されるんじゃないかな」

「悪くない話だ。まずこの島からでないといけないな」

「手段を考えてくれ。ただし泳ぐのは俺もうだめ。へりなんか呼ぶとまたここで空戦になりかねない」

「手段はあるんだ。今日は木曜日だよ」

「そうだよ」

「いつも通りだったらあさつての土曜日の夜に定期便が来る」

「補給はなくなっているんじゃないか」

「補給じゃないよ。あんたたちが上陸したあの入り江に毎週土曜の晩クルーザーが来るんだ。若い男と女、時々女は二人で酒と食い物抱えて降りてくる」

「暇な人もいるもんだねえ」

「暇人じゃないんだよ。若い男と女が夜無人島に上陸するとしたら何をするか決まってるだろ」

「はて何だろう」木村はとぼけているのか。

「まぐわっちゃうんだろ」

「その通り。こっちは緊張の連続なのにいつものぞき魔やっているよ。じゃないやな気分になる」

「じゃあその船ハイジャックしよう」

「ハイジャックじゃなくて徴用って言ってくれないかな」

「同じことだろ」
「兵隊の職業意識としてはそう言ってくれないと犯罪者と区別がな
く、なつちやうんだよ」
「俺としては区別する必要はあまり感じない」
「そこまでふてくされることはないだろ」

羽根のない　鳥食らうなり　ウサギ肉

肉を食べるのはほとんど拷問に近い。木村はパイロットだから、ウサギやネズミの干し
程度。極限状況の訓練は受けているはずだ。だがこつちはあくまで
も素人なのだ。木村のサバイバルキットの保存食に手をつけたかっ
たが、これは木村の所有物なので我慢するしかない。最近、人の食べ
物に黙って手を出しただけで殺されるという話も多いのだ。キット
の中に簡単な釣り道具があったので、土曜日の晩まで釣りをして過
ごした。悔しいことには釣果はまったくなかった。どうせ夜になれば
本土に渡れるのだから一日くらい何も食べなくてよいから調
料を持ち歩こうかなと思つた。

さて土曜日の晩なのだが。
ライトを煌々とつけた小さいクルーザーが入り江に入ってきて、
若い男と女がきゃーきゃー言いながら飛び降りてきた。すでにほと
んど半裸だ。あいつらすぐにでも始めるつもりか。
「自動拳銃持っていたら援護してくれ」
「どうするつもりだよ。戦闘行動で民間人を殺したら殺人罪だって
言われているんだが」
「そんなことはしない。けどさ、あのままにしておくのって気にく
わないだろ」
「それはわかるけれどね」
「あんたが自動拳銃でカバーして俺が交渉する」
「民間人に銃を向けるのはやばくないか」
「ゲリラ戦が専門なんだろ。不意打ちだまし討ち何でもありじゃな
いのか」
「それはそうなんだけど」
「だから手伝ってくれよ。それとも素人の俺に拳銃持たせて暴発事
故でも起こってややこしい事態にしたいか」
「わかったよ」
二人でこっそり忍び寄って鈴木に合図をした。古典的な体位で女
の上に乗っている男のむき出しの尻に鈴木が銃口を突きつけた。男

「がびくつと動いて運動をやめた。」
「ちよつとお。何でやめるのよ。」
「あんたの××××××××××でいる男の尻に銃を突きつけてい
る。一発で二人しとめられるかな。」
「ひっ」
「いててててて」
「あーあ。けいれん起こしちゃった。おい。モルヒネあるかな」
「渡しておいたパツクの中に入っているよ。」茂みに隠れている木村
が返事をした。
「ああこれか。俺は使い方に自信がないから自分でやってもらうけ
れどね、これを彼女の太股の付け根に注射したら何とか抜けると思
うよ。そのままだと血液が通わなくなつて中に入つたまま壊死する
からね。」
「それくらいいいじゃないか」
「わかった。秘密作戦の行動中だから詳しくは言えないけれど、あ
んなの船を借りる。本土に渡ったら迎えをよこすように手配して船
も港に帰しておく」
「若い男は冷や汗をかきながら必死にうなずいた。」
「じゃあね」
俺たちは船に乗り込んだ。

「あんた船を操縦できるのか」木村が不安げに俺に質問してきた。
「見よう見まねだがね。動かすことはできる。ただし海図は読めな
い」
「それは俺がやるよ。その多機能腕時計貸してくれたら方向は指示
する」木村が手を伸ばしてきたので携帯GPSを渡した。これ一財
産なんだが。
「アイアイサー」
島からある程度離れた海上でいったん停泊した。
「なぜ止める」
「この船の家捜しをしてみよう。これだけの高級な船なら何かいい
ものがあるかも知れない」
「何だか泥棒みたいな気分になってきた」
「なにやっても緊急避難だからかまわない。えーとこれはこの船の
登録関係の書類らしい。木村さん、この船の港はどこにあるのか海
図で当たって調べてみてくれないか」
「この港だ。距離は二十四キロっていうところだ」
「おい、この冷蔵庫みてみなよ」
「いいい。人間の食べ物だ。缶ビールもある」
「なにやっっている。本土に戻るのが先決だろう」
「いいじゃないか。俺半年近くもまともな食事していないんだよ。」

酒は我慢するがせめて食事くらいさせてくれよ」

「同感」

「どうして俺を不安にさせることばかりする」

無視無視。

「さてと。まだ何かあるかな」

「あった。高級で悪趣味なフアッションの見本集だね。木村さん、この服あんたにサイズ合うと思うよ。海に浸かった飛行服よりこっちの方がいいんじゃないか」

「作戦行動中に私服に着替えたらスパイと見なされるんだけど。」

それにその服、俺の美意識に合わない」

「本土に渡ったらそのつなぎの服、きつと目立つよ。かえってこう

いう服の方が目立たない」

「わかった。そうしよう」

「新品の下着や靴下まである。俺、靴下二足もらおうかな」

「本物の泥棒じゃないか」

「任務遂行を最優先にする職業人といってもらいたい。靴下だって

重要な備品のうちだ」

「いい加減にしろよな。早く出発しよう」

「わかりましたよ。だけれどね、俺船の操縦はできるけれど、海上航行の標識の読み方全然知らない。夜間の航行なんて怖くて本当は

やりたくない」

「ある程度海岸に接近して明るくなってから有視界で操縦すればいいだろ。とにかくまずまっすぐに南下してくれ」

「了解」

まっすぐ南下といわれても同じところをぐるぐる回ったりジグザグに進んだりやたらと時間がかかる。自動操舵に切り替えられるのかも知れないが計器の区別が全然できないのだ。空が薄明るくなつてかすかに陸地が見えたと思つた頃、正面からまっすぐやってくる小型漁船の一团が現れた。

「今から漁に出るんだね。たいへんな仕事だ」木村が感心している。「船止めるよ。すれ違ったときに下手に操縦していたらきつと衝突する。黙って浮いていた方が安全だ」

すれ違う漁船の甲板の人がやたらと興味深げにこちらを見ているのが気になった。ひよつとしたらこの船はこのあたりでは有名なのか。

「木村さん、この船の本来の港から離れたところにどこか上陸できるところはないかな」

「十キロ東に行ったところに漁港があるよ。何でそんなこと気にする」

「考えてみてくれ。この船の本来の持ち主が乗船していなくて、見たこともない三人の男が乗って帰港したら騒ぎが起こる」

「そうだな。無用なトラブルは避けた方がいい」

海岸線を横目に見ながら航行していくと漁村らしいものが見えてきた。沖合に投錨して上陸すればいいのかと思つたが今さら泳ぐのはいやだ。

「あの突堤と突堤の間を通れば漁港に入れるよ」

「何だかやたらと狭いな」

突堤をがりがりこすりながらクルーザーを岸壁につけて係留してから三人で上陸した。

建物の集まっているあたりから浅黒くて体格のいい男が近づいてきた。

「なんだ。竹夫じゃないのか。何の理由があつて突刺浜の竹夫がこの港に用があると思つたのに」

「訳があつて借りたんだ。詳しくは言えないけれど俺たち作戦行動中で急いでいたんで借りることにした。あそこに係留して大丈夫だつたかな」

「船が戻ってくるのは夕方だよ。それまでにどかせてもらえばいいよ」

「それと、任務を笠に着るつもりはないけれど、俺たちすぐに移動

しなければいけないんだ。あの船をもとの港に曳航してもらおうとありがたいんだが、そこまで無理頼めるかな。報告書にはこの港のこをとをちゃんと書いておくから請求書出してもらえば必要経費はちゃんと払う」もちろそんなことはするはずがない。

「あんまり巻き込まれるようなことはしたくないんだけどな。あんたらが今たいへんなのはよくわかるからね。やってもいいよ。それよりも借りたつていったけどどこであの船を借りたんだ」

「沖の無人島だよ」

「やつぱりそうか。女がいただろ」

「いたよ。二人とも船のことより自分のセックスの方が大事みたいだった」

「置き去りにしたんだろ」

「実はそうだ。完全にはまってはずれないんだもの。まずかったか」
「いい気味だ。こっちは体張って仕事しているのにあいつときたら学校の頃から親の金で遊びまくっていた。ほかの生徒なら処分ものことしてもあいつは親が学校に寄付しているっていうんで教師までがあいつにおべっか使うんだぜ。あいつのせいでひどい目にあつたやつが何人もいる。このあたりじゃみんなあいつのこと嫌っているよ。あんなやつ賢虚になるか病氣移されて死んじまえばいい」
「そんなやつなのか。ところで話は変わるけれどこのあたりの海っ

ていうのは荒れることがあるのかな」

「今の時期だとしけは多いよ。それがどうした」

「あんな小さいクルーザー程度の船だと沈むこともあるんだろぅね」
「うん。それはもういつ沈んでもおかしくない」男がにたりと笑った。

「そうなたら死体も見つからないだろぅね」

「そうだね。ひひひ」

「この港に来る前にたくさんの漁船とすれ違ったんだけど、第七西郷丸って知ってる？」

「この港の船だよ。竹夫のクルーザーに知らない人間が乗っていたなんて誰も気が付かなかっただろぅな。そもそもクルーザーなんて見なかったんじゃないか」

「お互い都合がいいですなあ。ひひひ」

「そうだねえ。ひひひひひ」

「それじゃ手間賃と燃料代で、これだけしか出せないんだけどいいかな」

「自分の好きなことをしてその上金までもらうんじゃ申し訳ないなあ。むひひ」

「そう言いながら彼は俺の出した大きい札を受け取ってポケットにねじり込んだ。なぜそんな金持っているといわれても昔からの習慣

「なんでもの。」

「何の話してたの？」

「後始末後始末」

「最寄りの鉄道の駅までは十キロの山越えだといわれた。道順を覚えてもらって出発した。車に乗せていってくれなどという所まで甘えは聞いてもらえないだろう。男にはクルーザーの処分に専念させてこっちの共犯にしないでしまえばいい。時間も稼げるしおそらく軍や警察に通報することもないだろう。」

「これからできる限り軽装にしてくれ。身軽な方がいい。鈴木さん、そんな戦闘銃これから先役に立たないし目立ちすぎるよ」

「あいよわかった。俺は拳銃とナイフがあれば大丈夫。そういう訓練受けているから」

鈴木は戦闘銃を無造作に分解して道ばたの草むらの中に放り込んだ。

「木村さん、そんな飛行服もうどうだっついていいんじゃないか」

「飛行服って全部あつらえなんだ。これ一着の値段でちよつとした高級車が買えるんだよ。これ捨てたらしばらくの間任務につけなくなる」

「次の任務のことより今どうすればいいのか考える方が先決じゃない。案

の定しばらくして木村がぼやき始めた。

「見栄張らないであの船から靴頂戴してくればよかった。飛行用のブーツってあまり歩くのには向いていないんだ」

「知恵はあとからやってくるもんだ。それにサイズがあつたかどうかもわからない」

「飛行機乗りっていうんは体力勝負だと思つていたのにな。おれは三百キロ行軍っていう訓練を受けたことがある」

「体の使い方が違うんだから比較できないよ」
道幅が広くなつて舗装がよくなつた。やがて小さい町に出た。

日の当たる道を買ひ物車を押しながら歩いてゐる老婆に出会つた。

「すみません。駅はどこにありますか」

「この道をまっすぐ行ってしばらくいくと信号のある交差点があつてそこを左に曲がるとすぐ。お仕事かね。ご苦労さん」

「どうも」

駅の時刻表は上に紙を貼つて訂正したものがさらにその上から訂正に訂正を重ねていちばん上には、今のところいつだかわからないが一日二本は動くただし保証はしない、などといういい加減な『予告表』が貼つてあつた。動いてゐるだけましか。窓口の駅員に聞いてみた。

「次はいつ頃きますか」
「上り？それとも下り？」
「どちらでも」
「上りは二時間半かもつと。下りはいつになるかわからない。一時
間前に出たばかりだから」
「そうですね。どうも」
駅前で待っていた二人のところに戻った。
「列車に乗るあてはあるのか」
「だめみたいだ。それにいやなことを思い出した」
「なんだよ」
「この鉄道は武装鉄道なんだ。しかもあっちがわ寄りの。たとえ乗
れたとしても身柄を拘束される」
「じゃあどうする」
「なんとかかしていちばん近い中立ゾーンに逃げ込むしかない。とす
ると」
駅前に何のために停まっているのかそもそも乗る客などいるのか
わからないタクシーが停車していて運転席で男があくびをしてい
る。
「あれを使おう」
「うまくできるのか」

「わからんよ。だけどこんな場所でこんなかつこうした三人がうろ
うろしていたら目立ちすぎる」

兵隊服と迷彩服と悪趣味な遊び人の服装の三人組だからこれは目
立つ。

「金はあるんだけどな。あまり使いたくない。自動拳銃利用する
か」

「またかよ。俺そういうのいやなんだけれど」

「しかたないだろ。場合が場合なんだから」

俺はタクシートの運転席に近づいて軽く窓ガラスをノックした。

「運転手さん。この車予約はいつている？」

「予約なんてはいつてない。そもそもなぜこの町でタクシー会社が
続けていられるのかよくわからななんだ」

「三人、千鳥足町まで乗せてもらえませうかね。列車は来るあてがな
いんで」

「しかしあんたら何だか汚れた服装じゃないか。車内が汚れると社
長が怒るんだ。それに掃除をしなければいけないのは俺なんだよね」

「無理は承知なんだ。でも公務なんだよ。請求書はあとなんて言わ
ない。現金でメーターの倍出すから頼むよ」

「銀行券のつまった札入れをちらつと見せた。
「ん。わかった。乗ってくれ乗ってくれ」

やっぱりいざという時にいちばん役に立つのは金なのだ。

鈴木と木村が後ろの座席にのって俺は助手席に乗り込んだ。タクシーが走り始めてしばらくたって人家がまばらになったところで俺は鈴木に目で合図をした。

鈴木が自動拳銃を突きつけると同時に俺は無線機とGPSとカメラのスイッチを切った。

「無線機とGPSとカメラを切らせてもらった。それから屋根の緊急灯つけたらただじゃやすまない」

「こんなことじゃないかと思っただよなあ。公務と称して民間人に拳銃突きつけて脅迫するかあ」

「やりたくてやってているんじゃないよ。ほかに手段がないんだもの」

「で、何をすればいいんだ」

「このまましばらく走らせて最初の角を右に曲がればいい」

人家が見あたらなくなつてからさらに二十キロほど走った。

「それじゃ車を止めてくれ。それからゆっくりドアを開けて降りる。ケータイはおいてく」

運転手は悔しそうにケータイを差し出して車から降りた。俺はすぐにそのケータイの電源を切った。

「乗り逃げするのさ」

「しかたがないだろ。金袋は興味がないから渡す。歩いて会社に戻

るなり警察に行くなり好きにしてくれ」

「電話のあるところまで二十キロ以上あるんだぜ。歩けって言うのか。せめて無線で迎えをよこすように言ってくれないかなあ」

「そんなわざわざ自分から捕まるようなまねするはずないだろ。車はちやんと会社に返すようにしておく。それに約束通りの金はあとで払うから。たまには運動するのもいいよ」

「訴えてやるからな」

「好きにしろ」

俺は運転席に移って自動車を走らせ始めた。

「これからどこに行く」

「踏潰市に逃げ込む。あそこは中立非武装宣言をしているから。あの運転手きつと俺たちの目的地を間違えている」

「踏潰市ね。一年前にあそこで戦闘に参加したことがある。大激戦だった」

「木村さんもあそこで空爆やったはずだな」

「そうだよ。装備もないのに精密爆撃しろって命令が出ていた」

「それじゃ空と陸で同じ時に戦闘していたのか。まんざら縁がないわけでもないな」

「彼に指摘されて気になったんだけれど、車両を攻撃するんじゃない。彼に公共施設を爆撃しろっていう命令だった」

「俺もおかしなことがあった。配置について聞いたときには民間人は誰もいなかっただ。それにあとほかの人間に聞いたらどの建物にも金目のものは何もなかつた。戦闘が始まった。戦車部隊は相手を狙うんじゃないかと建物ばかりねらって砲撃していた。白兵戦になると思つていたら直接戦闘はなくて火をつけて退路をたてた。かおかしな命令ばかりだ。市街地がひとつまるまる焼け野原になつた。ほとんど戦死が出なかつた。つまるだけども、そんな戦争つてあるのかな」

「むかし大地震で政令指定都市がまるまる壊滅したことがあつた。ろ」

「ああそれ知つてる。学校で習つた」

「あの時、しめたこれで区画整理と再開発ができるって公然と口にした人間が中央に何人もいたんだ。そうだ。たぐさんの人が目の前で死んでゐるのに」

「ひでえ」

「でもそれつて今の話とどういう関係がある」

「ものがぶつ壊れれば新しいものを作る仕事ができる。そうすれば予算がつくし雇用も増える。天災と人災の違いだけということだ。軍需産業が儲かるだけじゃないんだ。古い市街地を否応なくつぶして再開発をするための空き地にするのが目的。戦闘はそのため」

の道具だったんだらう。戦争でもなけりやそんなことおおっぴらに
できないからね」
「それじゃ俺たちがしたのは戦闘行為じゃなくて解体工事か」
「そう思うだろ。誰だってそんなことに利用されたらプライド傷つ
くよね」木村が同意する。
「昔隣の国で戦争があったときこの国は特需で好景気になった。そ
れと同じで今民需は行き詰まっているから何とか特需で活路を切り
開けないかと考えた。かといって隣の国に理由のない喧嘩を売るわ
けにもいかない。負けちゃうかもしれないしね。だから自分の国の
中で自前で戦争してそれで儲けようって考えた人間がたくさんいた
んじゃないのかな。どこかわからないけれど誰かがこういう道しか
ないって相談して戦争することになったんだらうね。なんてったつ
て戦争は最大の消費行為だからね」
「なんだかそれってタコが自分の足食べて生き延びているような話
だ」
「たとえば古いよ」木村が苦笑する。
「タコとは決定的に違うことがあるよ」
「何が」
「タコはじきにあしがまた生えてくるけれど、この国はあしが生え
替わるあてがない」

「なるほど。そりやそうだ」
「いろいろな土地で仕事したけれどね、地場産業という役所と公
共工事が加わっていう町がかなりあった。今度は地場産業のひと
つに戦争が加わった。今は各地で基地の誘致合戦している。基地が
あると酒と女とバクチはついて回るからね。それだけで金がどさつ
とおちる。ブラックマネーもかなり表面化してきたんじゃないのか
な」
「俺たちみたいな職業人は命令に従うってことを根拠に行動できる
けれど、あんたみたいに外側から見えていた人にはきつと馬鹿馬鹿し
いんだろうな」
「はつきりしているのは戦争に関わったら戦死する可能性がある
いうことだけだ。俺にとつての現実はそのだけ」
「ねえ木村さん、この人なぜ俺たちみたいなの職業人でも知らないよ
うなことをたくさん知っているんだろう」
「それはさあ、職業人としての訓練も受けていなくて技術も道具も
ないとしたら、あととはどれだけの情報を手に入れて自分がどんな立
場にいるのかを知るのが生き残る手段になるからじゃないのかな。
よくわからなけれど」
「俺としては他人の心配より自分がどうやって生き延びるのかに専
念してもらいたいのだが。」

すれ違う車も歩行者も全く途切れた。

「この交通信号なんだけれど」

「うん」

「これがまだちゃんと機能しているっていうのは不思議だ」

「管理するシステムがあって人間がいて、電力が供給されている。どこかで誰かが調整しているんだろう」

「さっきから一台も車とすれ違わないのになんでこんなところに信号作ったのかな」

「使い道なんかどうでもよくて予算が欲しかったんだろ」

「それとこの戦争と同じだっていう理屈か」

「そうなるね」
すれ違う自動車がぼつりぼつりと現れ、都会が近づいてくる予感がした。

簡単な検問所があったがあらかじめ言い含めておいたとおり木村

が休暇だと言うと何も調べずにそのまま通してくれた。俺はタクシ

ーの運転手に見えるのだろうか。

「あんたの影響かも知れないけれど、何だか気になってきた。そも

そもどんな理由でこの戦争をやっているのかな」
「中央政府の見解はずっと同じだ。これは戦争ではなくて演習だ、限りなく実戦に近い演習を続けているんだとしか言わない。事実さ

っかけは演習で反則行為が出てエスカレートしていったらしいけれど。それだってあらかじめ話を通しておいてわざとやったのかもしれない。せめて政府軍と反政府軍の戦いだっていうんならまだ納得できるんだが」

「中央政府というものがいまだに存在しているのも不思議だ。ほとんど何も機能していないのに」

「みんなが説明を求めているから誰かがその役割を演じなければいけない。それなりの存在理由はある」

「税金は今誰が管理しているんだろう。この戦争、税金使ってやっていっているのに」

「俺は自分が生きるのに精一杯だ。会社の研修で講習会に出たんだけれどね、いかかわしい評論家とかいうやつらが、政治的対立だの思想的対立だの民族的对立だの宗教的対立だの権力闘争だのいろいろな戦争の理由をあげてくれた。でも俺は信じない。あいつらには他人事なんだきつと。これは断末魔なんだ」

「誰のだよ」

「この国のだ。この国が行き詰まって滅びないように、必死になつてガス抜きというかモデルチェンジのテストをしているんだ。俺はもう手遅れだと思うんだけどね」

「モデルチェンジっていうけれど、やっていることは殺し合いで壊

し合いなんだぜ。犠牲が多すぎないか」

「そういうぎりぎりのところまで追いつめられているんだって彼は言いたいんだよ」木村が指摘する。こいつ思ったより頭いい。

「そうだよ」
「じゃあこの戦争はいつ終わるんだろう」鈴木はまた無邪気な質問をする。

「終わらないんじゃないかな。戦争を続けているうちはこの国はたとえじり貧でも存在し続ける。戦争が終わってしまったら国そのものが滅亡する。自転車操業の戦争だ」

「俺そんなことのためにこの職業選んだんじゃないのになあ」
「それを言ったら彼に悪い。民間会社からの出向で兵隊やらされて
いるっていうおかしなところまでできているんだ。これから先どんな
ことになってもおかしくない」

「そのことは言わないでくれないかなあ」
「ああごめん。悪かった」

車は市街地に入った。駅の近くの路上に車を放置して鍵を遠くに
ぶん投げた。

「なんだ。返してやるんじゃないのか」
「そんなわざわざあしがつくようなまねするかよ」

「あんな小さな町のタクシー会社だと車一台なくなっても倒産しか

ねないぞ」

「知るかそんなこと」

「どうしてそんなに投げやりになるんだよ」

腹が減って怒りっぽくなっていたのだ。早く食事がしたい。昔はよく利用していたチェーン店のレストランに入った。

「いらっしやいませ」

「ビールカレーの大盛りください」

「申し訳ありません。本日、肉が入荷しております」

ポニーテールで人形みたいな顔をした若いウェイトレスが頭を下げた。

「それじゃあビール抜きの大盛り」

「ポーク抜きのポークカレー」

「チキン抜きのチキンカレー」

「はい承知いたしました」

「あのウェイトレスしやれがわかっているのかな」

「いや、違うね。マニユアルの通りやつているだけだ」

「この店で肉が手に入らないようじゃお終いだな」

「かえって肉なんか食べない方がいいよ。今時何の肉が出てくるかわかったもんじゃない」

鈴木その言葉に、三人同時に一瞬気持ち悪くなりそうになった。

「おまたせしました」

要するに三皿の野菜カレーが運ばれてきた。なぜどれを誰の前に置くか迷うのだ。

「水ないの」

「申し訳ありません。ご注文いただかないとお出しできないんです」

「ビールと水とどちらが高いの」

「ビールは置いていないんです」

「水三つ。銘柄は何でもいい」

「はい承知いたしました」

「な？同じことしかいわないだろ」

食事だけに限っていえば基地の食堂で食べる方がましだった。

「えーと、カードは使えないね」

「はい。現金でお願いします」

金額を聞いて驚いた。少し前ならちよつとしたフルコースがひとり分食べられたはずだ。俺一人だったら踏み倒して逃げる。

店の外で待っていた鈴木と木村と一緒に町を中心にある駅の前の広場に行ってみた。

「駅に行つて列車の様子を調べてくる」

「じゃあこの辺にいる。硬貨持っていないか」

「あるよ」

「あのコーヒーが飲みたいんだけど」
昔はライバル同士だった会社が資金がなくなって共同で設置して
いる自動販売機が置いてある。
「じゃあ二人分渡しておく」
「基地に戻ったら返すから」
「駅の窓口に行つて聞いてみた」
「すみません。立島方面の列車はまだありますか」
「立島直通はないです。途中の糸抜までしか行きません。そこから
先の乗り継ぎ便はないんです」
「明日はどうですか」
「現在の予定では九時半発の各駅停車が立島まで行きます。それよ
り前の便は通勤切符でないと乗車できません」
「予約できますか」
「各駅停車に予約はありませんよ。この頃は指定席はありませんか
ら」
「そうですか」
俺は木村と鈴木のを待っている駅前広場に戻った。
「どうだった」
「明日まで列車はないそうだ。糸抜までは行くけれどあそこはあつ
ち側のど真ん中だ。ここで泊まるしかない」

「野宿か」

「野宿なんか絶対にしない。昔使っていたビジネスホテルに泊まる」

「金大丈夫か。現金持っているのはあんただけなんだぜ」

「野宿したいんならそれでもいいよ。俺一人でもちゃんとしたベッドで眠りたい」

「それはその方がいいんだけど」

そのビジネスホテルの窓ガラスは半分近くが割れてベニヤ板でふさがれていたが営業はしているようだった。

「いらつしやいませ」

「急でわるいんだけど今夜三人泊まれないか。エキストラベッドでも何でもいいから」

「はい、ご用意できますが、お支払いの方はいかが致しましょうか」
「カードは持っているんだけどどれが生きているかわからないんだ。調べてもらえますか？」

「ちよつとまった！」
鈴木がいきなり俺の腕をつかんでロビーの片隅に引っ張っていった。

「なんだよいきなり」

「あのね、クレジットカードを使うと、オンラインですぐ足がついちやうの。だからこれから先そういうものは使えないよ」

鈴木が必要以上に小さな声で俺に指摘した。

「ええ？わかったよ不便だなあ」

フロントに戻って話を初めからやり直した。

「すみません間違えました。現金で払います」

「承知しました。では前金でお願いいたします。お部屋をご用意しますので、しばらくお待ちください」

また財布の中がさびしくなってしまった。

「いやあ、シャワーというのはいいなあ。何ヶ月ぶりだもんね」

「あまり水使わないでくれよ。最近はメーターがついていて追加料金取られるんだぜ」

「細かいこと気にしなくていいから」

「俺の金だ」

「二人ともよせよみっともない」

「そういう自分の格好をその鏡で見てみな。自己嫌悪に堕ちるから」

「わかってるよ」

「あの一。言いにくいんだけど」

「何だよ」

「金貸してくれないかな」

「いくら」

「五枚。大きいやつ。申し訳ないけれどさっき財布の中が見えちゃった」

「そんな大金どうやって使うんだよ。明日は基地に帰るんだよ」

「そのー。ご無沙汰しているんだ。半年間」

「何が」

「風呂屋」

「風呂なら今シャワーを浴びたじゃないか。それにこのホテルにはサウナもあるみたいだよ」木村が素つ頓狂な質問をする。

「そうじゃなくて別の風呂」

「何のことだ」

「わかったよ。木村さん、彼が行きたいのは個室付き特殊浴場のことだ」

「ああそうか」

かまととかお前は。

「五枚で足りるのかな。相場っていうものは知らないけれど」

「それはこっちの口ひとつで足りるようにしちゃうの。そういうの得意だから」

「好きなようにしてくれ。そのかわり明日になっても戻ってこなかったら置いて行くからね」

「大丈夫だよ。基地に戻ったら未払いの給料ふんだくって返すから」

「楽しんできな。このドスケベ」

鈴木がいそいそと出かけてから木村がじとつとした目つきで俺を見てゐる。

「作戦行動中に女を買いに行くあいつもあいつだけれど、それに金を出すあんたもあんただ」

「だってあいつパンクしそうなんだもの」

「そうだったかな」

「考えてもみなよ。四ヶ月間あんな無人島で文字通り孤軍奮闘して守備していたのが全部徒労だってわかって、ようやく抜け出したらそれからこっちは軍事行動じゃなくて犯罪行為の連続だろ。ストレスたまってどこかでぶつつんされたらこっちが危ない」

「よく気がつくな」

「そういう現場をたくさん見てきたの」

「あんたは結婚してるのか」

「かみさんと子供一人の家族持ちだよ。一年近く会っていないけれどね」

「よく我慢できるね」

「その分想像力がたくましくなったから、おかずに不自由しないよ。木村さんは？」

「結婚はしているけれど厳密には夫婦とは言えないな」

「どうして」
「奥さんはレズなんだ。それで俺はホモ。立場は違うけれど同じ同性愛主義者としての連帯感で結ばれているだけ」
「こんなやつと一晚あんな狭いボートに身を寄せ合って乗っていたのか。ひよっとして殉職したパイロットというのはこいつのホモだち。」
「ことわっておくけれど俺はノーマルだからね。求めてこられたら貞操を守るためには何でもするぞ」
「誤解しないでくれ。俺は愛し合っている人としかできないんだ。その点ではとても保守的なんだ」
「ホモのどこが保守的なんだよ。」
「何だか疲れて眠い。よく考えたらずっと移動し続けて寝ていないじゃないか」
「明日は何時にここを出ればいい」
「余裕を持って八時。お休み」
鈴木が深夜に帰ってきたのに気がつかないまま眠りこけていたようだ。
翌朝ホテルをチェックアウトして駅に向かった。感触から判断して強姦された様子はない。

「昨日行った風呂屋で誰にあつたと思う？」
「おまえのかみさん。いや、鈴木にはこういう冗談は通じない。本
当だったらどうするのだ。」
「昨日入ったレストランのウェイトレスの子だったんだよねー。ま
だ下手なんだけれど、もうムチムチ」
「それはいいことだよ。昼も夜も一生懸命働いているんだから」木
村が言った。
「俺も本気でそう思う。きっとマニュアル通りだったに違いない。
想像する気も起こらないけれど。」
「変なんだよね。どうしてもうほとんど主体のない国立銀行の銀行
券が貨幣として通用するのかな」あんなことにその金を使っておき
ながら、今さら鈴木がのんきなことを口に出す。
「ただの紙だつてわかつててもそれに価値がないって言ったら軍は
資材を買えなくなるじゃないか」
「ああそうか」
木村がみんなはわかっている口には決して出さないことをきわ
めて単純明快に指摘してしまつた。それだと俺の財布の中にある俺
の稼ぎであるはずの紙切れの交換価値は軍によつてのみ裏付けられ
ているのだな。くやしいけれど反論できない。
「それにしても不思議な感じがするなあ」

歩道橋の上から見下ろすと、駅になだれ込みあるいはあふれ出し
てくる人々の群れは、今の国が内戦状態にあるというところが信じ
られないほど、昔通りの日常的な光景に見える。日常的に見えたと
いうことがむしろ今のこの現実の中では異常なのだ。自分たちは今
どちら側に所属しているのだろうか。
「俺たち今一体何をしているんだろうな。あそこを歩いている人た
ちの誰か一人と交替してそのまま会社に行って仕事をしても別に誰
も困らないんじゃないかな」
「そんなに簡単なことじゃないと思う」木村が冷静に指摘する。
「そうだよ。会社は会社で生き残るのに必死で努力しなければつ
いていけないよ」
「どっちが良かったのか悪かったのか。俺はこの道一筋だから想像
できない。とところでたばこまだあるかな」
「最後の二本だよ。これから先はお金を節約しないといつどんなこ
とがあるかわからないからね」
二人そろって吹き上げた紫煙が青空に吸い込まれていく。
「二人とも肺ガンで早死にするぞ」木村は露骨に不愉快そうな顔を
する。
「木村さんが先に戦死する確率の方が高いと思う」俺はわざと言っ
てやった。

「俺も」
「そろそろ行くか」
「昨日いった窓口をのぞいてみた。同じ駅員がいた。」
「すみません。立島方面の列車は九時半に出ますか」
「予定通り出ますよ。二番線です」
「それでは立島まで大人三枚ください」
「はい。失礼ですが公務ですか」
「内緒なんです」
「では現金でお支払いただけますか」
「はい。ではこれだけ」
「はい。ちようどちようだいします。それから念のため」
「何ですか」
「ご承知かと思いますが我が鉄道は武装中立宣言をしています。駅構内または車内での武力行使は実力で制圧します。ですからたとえ相手側の人間と出会ってもめ事は起こさないでください。本来は火器の携帯も禁止しています。おわかりですね。何かあったらあなただけの問題ではなく後ろにある組織全体と我が社の関係の問題になりますから。くれぐれもよろしくお願いしますよ」
「わかりました」
ホームにろくに掃除もしていない埃まみれの車両が入ってきた。

「なんだかすすけてるなあ」鈴木がぼやく。

「ほこりだらけだ。ろくに掃除もしていないんだろうな」木村が車体の表面を指でこすりながら言った。

武装警備員がじろつとこちらの方をにらんだ。

「なんで民間人が拳銃で武装できるのかな。今、銃刀法はどうなっているんだろう」木村は現実を把握していないのだ。

「そんなものないも同然だ。たいていの人は武装している。新しい市場ができたっていうんで商社が公然と武器を輸入して流しているんだもの」

「素人がああいうものを持つのが一番怖いんだが」
「こんなことに限って鈴木はプロとして判断している。」

座席に着いたとたん、鈴木が汚れたブーツを俺の脇のシートの上に投げ出して大あくびをした。こういう無神経な人間は嫌いだ。

列車のたりと発車した。

「何時間かかるんだろう」

「時刻表なんてあてにならないけれど昔は三時間くらいだった。今日中に基地に帰ればそれでいいんじゃないのかな」

「終わりに近づくほど時間がゴムみたいのびていくような気がする」

「それでいて終わってみると何もろくに覚えていない。何だか空中

戦も墜落も全部フィクションのような気がしてきたよ」

「でもこの疲労感だけは本物だ」

しばらくして木村がそわそわし始めた。

「ちよつと席換わってもらえないかな」

「どうして」

「さっきから気になっているんだけど、隣の車両に乗っている若い兵隊たちがこっちの方をじろじろ見ているような気がする」

「気のせいだ」

あるいは関係妄想だ。

「ほらやってきた」

鈴木が拳銃に手を伸ばすがそういう問題ではない。

「あの、失礼ですがAチームのエースの木村さんじゃありませんか」

「人違いですよ。よく間違えられる」

「やっぱり木村さんだ。握手してもらえませんか。僕ファンなんです」

ぴかぴかの一年生が無邪気に手をさし出した。

木村が露骨に不愉快そうな顔をしたので俺が代わりに答えた。

「あなたの上司、じゃなかった上官の方にこちらにきていただけますか。あなた今仕事でしよう」

「はい！失礼しました」

「ただいまは部下が失礼しました。最近の若い者は公私のけじめと
いうものがわからないのです。自分は第四工兵連隊の坂野少佐とい
います」
「このような格好で失礼します。自分は木村少佐です」
武装警備員の監視の中で刺激的な敬礼はできないのでお互いに目
で挨拶するだけだ。
「やはり木村さんでしたか。あなたのことはどちらの側に属してい
るか関係なく有名です。部下たちが興奮するのも無理はない」
「しかし第四工兵連隊といえればサイドが違うじゃないですか。お互
いの立場というものがあると思えます」
「えへん。その通りです。しかし優秀な軍人というのはその時の立
場を超えて歴史に名を刻むものです。ロンメルしかり。パットンし
かり。歴史的人物に会えて光栄です」
もう口もききたくないという表情の木村に変わって俺が口を開い
た。
「我々は仕事を終えて巢に帰りたいたいだけだ。鉄道会社の人にも言わ
れたとおり我々はお互いにこの列車の中では無力です。ここは無関
係ということでは知らない振りをしていただけませんか」
「人数で言えば私の部隊はあなたの方三人を拘束して連れ出すことが
できる。あるいは今無線でこの列車に木村少佐が乗っていることを

知らせることも可能です」

「将校のその言葉に俺はいよいよ最大の山場がくるのかと本気でびびった。実力行使になったらこっちで計算できる戦力は鈴木しかいなくて、相手はいくら新米とはいえ一ダース以上の兵隊がいるのだ。木村を確保したなんていう連絡をされたら、両方の側から一個師団くらいこの戦力が押し寄せてここで大戦闘が勃発するかもしれない。そこにこの鉄道自前の戦闘部隊まで介入してきたら、何が何だかわからないうちに気がついたら死んでいたという間抜けな終わり方になるかもしれない。俺、どれもいやだ。俺、こんなところで死にたくない。」

「しかしながら私はそもそも事務職の出身です。突撃工兵隊の経験をしたことがないので戦闘行為には縁がない。もめ事は苦手です。そのかわりといつては何ですがお願いがある」

「何でしようか」何だか将校の言葉の方向が違ってきたのでやや安心しかけた。

「一緒に写真を取っていただけませんか。娘に自慢ができます」

「将校が上着の内ポケットから小型のカメラをいそいそと取り出したので、俺は思い切り心の中でずっこけた。戦争の最中だというのは何のためにそんなものを持っているのだ。鈴木は俺には関係ないとそっぽを向いてしかとしている。将校は当然だといわんばかりに

俺にカメラを押しつけた。木村はそれでも職業意識からなのかそれともこの場合は何とかして生き延びなければいけないという生存本能からなのか必死になつて笑顔を作ろうとする。しかし顔がひきつつている。将校がカメラに向かつてVサイン出すか。こんなことじゃこの組織もおしまいだ。

「では我々は次の糸抜で下車します。新人研修で現場を見せなければいけないのです」

「ご苦労様です」

「木村さんもがんばってください。では」

木村さんががんばるってあんたの方の人間がたくさん死ぬってことじやないのか。有名人間に向かつてがんばってくださいと言うのが礼儀だなどという大人が勘違いしている。

「何だか若い兵隊ばかりだったなあ。あんな連中の上官にはなりたくない」木村がぼやいた。

「工兵の新人って最近は大学卒ばかりなんだと。でも学校で何も身につけてないから初めから教育し直さないと何にも役に立たないらしい。こんなことなら自前の教育機関でもっと若いうちから教育できるように工作しておけばよかつたって、知り合いの下士官がぼやいてた」鈴木が言った。

「雑誌で読んだんだけど最近では志願兵が急増しているらしいよ。今

までプータローとかフリーターとか中途半端にやっつけていても生活で
きていたのが、ここにきて本格的にやばくなつて必死で就職活動し
てるみたいだ。でもこんなご時世だから本当に使える人間しか会社
で雇わなくなつただろ。そこにはいけない人間が軍の窓口に殺到し
ているんだ」

「何だよ。それじゃ軍隊は人材の掃き溜めだつて言いたいのか」

「そうじゃないよ。古典的な方法で人材育成している会社がもう軍
隊ぐらいしかないよ。古典的な方法を言いたかつただけだ」

「俺にはそうは聞かえなかつた。それに軍隊は会社じゃないぞ」

「そうだな。会社の方がもっと苛酷だ」我ながらどうしてこう挑発
的なことばかり口にするのか。

「二人ともいい加減にしろよ。ここで口げんかしたつてどうにもな
らないだろ。あんたもわざと職業人のプライド逆なでするような言
い方やめなよ」木村が仲裁に入った。

「ああ悪かつたよ」

「軍隊が基幹産業になつちまつたつていうのか。それじゃ敵味方に
分かれていても軍隊がこの国の最後の砦つていうことにならない
か」

「昨日車の中で話したのはそういうことだ」

「それつて不健全じゃないのか」

「そんな分かり切ったこといまさらわざわざ言わないでもらいた
い。そんなことにも気がつかないほど鈴木は馬鹿なのだろうか。」
「今回の俺の作戦行動が全部実況中継されていったって言ったよね」
「そうだよ。複数のチャンネルで同時にやっていたからカメラは二
十台以上設置されていたんだろ。ね。きっと上層部の誰かから情報
が流れていて目標はどこでどっちの方から戦闘機が入ってきて、ミ
サイルを発射してからどこに離脱していくかも全部わかっていて、
カメラの場所の取り合いで入札があったり談合があったりしたんじ
やないの」
「なんでそんなことするんだろう」
「決まってる。儲かるからだよ」
「儲かるって、これ戦争なんだよ。メディアに当事者意識はないの
か」
「そんなもの昔からない。あいつらネタが欲しいんだよ。
ネタになるものだったからスキャンダルだろうと殺人事件だろうと内
戦だろ。とんでもない。それと噂だけなんだけれど、
戦争の一部始終を記録したテープを外国のメディア産業に売ったり
衛星中継でリアルタイムで海外の放送局に流したりそれで儲けてい
るところもあるらしい。さすが本物には特撮にない味がある、そう
いうところかな」

「いい加減にしてもらいたいな」
「こんな馬鹿げた戦争をしているのが国際社会の中で恥さらしだっ
てことがわかっていないんだろね。そもそも恥の意識なんて昔か
らなかったのかも知れない。自分の恥部をさらしものにして金稼ぐ
なんてすごい国だぜまったく」
「どこかで聞いたような話だと思ったら、それってAV女優が陰毛
と性器見せ物にして金もらっているのと同じじゃないのか」
「多分そうなんだろうね。彼女たちは覚悟してプライド持っている
のかも知れないけれど、メディアはそんな自覚はないんだろう。両
方とも変態だって可能性もあるが」
「俺、昨日からこの人の話聞き続けて、どんどん自分の職業に対す
る自尊心なくしているような気がする」
「俺もだよ。これで基地に帰ってもこれから先仕事やっていく自信
なくしかけている」
「心配ないよ。もうじきメディアも何もかも巻き込んだ泥沼の本格
的な戦争になる。そうなたら自信とかプライドとかも役に立たな
くなるような生き残りかけた殺し合いになる。勝負の鍵は生きる
ことへの執着心と他人の死への無関心だけだ」
「あんたはいつそのことそういう時代が来ることを望んでいるわけ
だね」

「そうかもしれないね」

「きつとそうだよ」

今は山中今は浜。今は鉄橋わたるぞと。この歌の列車は時速何百キロで走っているのだ。

お互いにもう口をきく気力もない。ただぼうつと顔を見合わせている

「え。つぎはたてしまあ。たてしまあ。この列車のお、終点でえす」
列車がくたびれた吐息をはくようにして終点の駅のホームにはいずり込んだ。

時刻はとつくに昼を回っていた。

「なんだ。もうとつくに昼を回っているじゃないか」

「俺、何だか急に腹が減った。おかしいな、一週間くらいの絶食は平気なように訓練されているのに」

「昼食ならこの近くによく知っている食堂がある。食べてから帰ろう」

「基地に連絡して迎えの車を寄越してもらおう方がいいんじゃないのか」
木村が不安げに言う。

「俺がその店に行きたいの。二度といけないかもしれないから。ここまで来たんだから少しくらい俺のわがままにつきあってくれよ」
「いいよ。それだけのことはしてもらっているからね」

駅裏のあばらやの汚れたのれんをくぐる。

「おばさん。こんちわ」

「あら、ひさしぶりね。しばらく来ないから転勤しちゃったのかと思ってた」

「ずっと忙しくて来られなかったんだ。三人分、昼飯できるかな」「できるわよ。って言ってもおかずはその冷凍ケースの中のものしかないんだけど」

「これだけあれば充分。俺、この魚の煮付けと揚げ出し豆腐」「自分で出していいのか」

「好きなものを選んで暖めてもらえばいいの。ここのシステム」「あの、三品もらっていいかな」鈴木は本当に意地汚い。

「まだ金はあるよ」

「俺はこれにする」

「おばさん、ごはんと味噌汁も頼む。それとビールもらえる？」

「中ビンしかないんだけれどいいかしら」

「できれば二本」

「はい承知しました」

どんぶり飯と味噌汁と暖めたおかずが出てきて、三人とも黙々と食べた。俺の脳髓はこの味噌汁のような味がするのだろうか。おや、なんでこんなことを考えるのか。

「こんな建物でこういう内装と家具。それにこの家庭的な味。なんだか定食屋の原風景って感じ」

鈴木の口から見かけに似合わない言葉が出てきて、一瞬はしが止まった。

食事を終えてから俺は勝手にコップにビールを注いで、冷めかけた揚げ出し豆腐をつまみに飲み始めた。

「いいのかなあ。まだ終わっていないんだよ」木村は心配性なのだ。「俺の稼ぎで俺が金出して飲むんだ。気にいらんならこの勘

定自分で払って歩いて帰れ」

「そこまでやけになることないだろう」

「これが飲まずにいられるか。」

「あー。話したくないんなら答えてもらわなくてもいいんだけど、どうしてあんたみたいな出向の人なんて出てくることになったんだろう」

鈴木のその質問を言い訳に俺は徹底的に愚痴ることにした。

「俺は学校出てから営業一筋でやってきたんだ。飛び込みで顧客をつかまえる専門の足と自動車で稼ぐ稼業。俺の業績がその年の支社の売り上げの半分近いことだってあったんだぜ。自分で言うのもおかしいけど俺ある程度優秀な営業マンでそれなりに誇りもついていたんだ」

「ふうん」
「それがだんだんおかしくなってきた。出る釘はうたれるってやつだ」
「釘じゃなくて杭じゃないのか」木村はインテリなのだ。
「どっちでもいい。それまで歩合給だったのがいきなり固定給になつて、おまけにこれからは営業士の資格持つていないと昇給しないって言われたんだ。脅迫だよ。あんな紙切れのテストで営業の能力なんて判定できるわけねえだろ」
「それってペーパーテストで射撃の能力判定するようなものか」鈴木が質問する。
「知るか。つけ込まれるの悔しいから必死になつて受験勉強して営業士の資格とつたよ。会社は申し訳程度に資格手当出すだけだった。そしたら次はばそこんだ。たった三日間の講習でこれから報告書は全部ばそこんで出せなんて言いやがる。ばそこん使えないと社会人じゃねえとか生きる資格がねえとか建前なのか本気なのか自分でわかつてなくて平然と口に出すんだ。ろくに仕事もできねえくそガキどもが中年がばそこん使えないっていうだけで露骨に軽蔑した顔しやがる。あんなものは本来の自分の仕事ができなくてきてそれで誰かに動かせて利用できるつていふのかよ。やらせてみやがれつてんだ」
「みの営業ができるつていふのかよ。やらせてみやがれつてんだ」

二人がだんだん腰を引き始めた。
「頭にきたから自分で勉強してばそこん馬鹿のマニユアル馬鹿が、人が必
死に獲得した顧客をばそこんにデーターとか称して覚え込ませやが
つて、広報にも担当にも断りなしでいんたあねつとだかなんだかわ
けのわからぬも担引勝ち顧客の信用情報たれ流しやがってい
きな得意先から取引打ち切りの電話がかかってくる、あわてて文
句を言いにいったら、そうでしかないぞぬかしてへらへら笑って
やがる。この商売、信用が第一なんだ。あのかくそがきども、情報つ
ていうものの本当の意味なんか少しもわかっていない。そんなが仕事
にばそこんで情報扱わせるなんて正気じゃねえよ。ばそこんが仕事
するんじやなくてお前の働きの給料払ってんだって言いたくなつ
たね。会社のたいこもちになるつもりなかつたから言わなかつたけ
ど」
「どうしてそんな風にちゃん仕事をしてる人を追いつめるよう
なことをするんだらう」
「リストラってやつだ。会社の体質改善しないといけないと行き詰まるって強
迫観念で、とにかく古い人材は切り捨て新しい人間をいれなきや
いけない。口実だった。リストラが会社の目的になつちまつた。そのために
首切る口実だった。リストラでもよかつたんだ。首ばかり切つていたなら

やる気のある人間がどんどん辞めていって会社が左前になるってこ
とがわかっている外国語ができない営業マンは無能だなんて言いだし
代は二つ以上の外国語がなかったら倉庫係になれだと言ったよ。役員の中
やがった。それができない人間が一人もいないのに何言ってるんだよ。若
外国語で道案内できる人間が一人もいないに何言ってるんだよ。俺さ
造どもは自分の国の言葉だ。満足に話せないに何言ってるんだよ。俺さ
あ、学生時代はそれほど自慢できる成績じゃなかったけど、英語で
飛び込みやって商談成立させたことだ。勉強なんだ。現場で役に
立たなかった。完全な勝負なことにきつい事勉強なんだ。中華喫茶の大
けなない。完全に頭来たから俺広東語覚えたよ。中華喫茶の大
から来て。いる女の子か。まあさ。い。この出向だ。俺は畏にはめられ
たんだ。くそ」
「あのー。少しは気にしてもらいたんだけど、俺たちその出向
先で働いているプロパーの人間なんだけれどね」
「やかましい。人が話しているのに横から口はさむんじゃねえ。文句
があるんなら表に出て勝負するか。お前から戦争馬鹿なんかサラリ
ーマンの気持ち。分かってたまるか」
「戦争馬鹿。何だよ。その言い方」鈴木が急に気色ばんだ。「こ
つちは命がけで戦争してるんだ。たったこれっぽちの作戦行動であ

「ふたに現場のつらさがわかると思っ
「比較的なんかできないよ。この人のつらい立場もわか
「ホモにかばわれたってうれしくも何ともない。
「サラリーマン馬鹿」鈴木がぼそつとつぶやいた。
「俺の受け持ちじゃないのに納品の立ち会いにいけて、帰ってこなく
地に行つていたとき、いきなり電話がかかってきて、帰ってこなく
て、いからその仕事やれだつてよ。最初は事務だけだったから
だ、命が出たよ。それが営業で運転ができたんなら車両班に回れ
て、四時間拘束されて外出許可も出ない。家族にも会わせてくれねえ。
そのうち赦免になるかと思つたら、お前は使えらるからレスキューチ
ームに入れたって抜かしやがる。使えらるっていわれたってうれし
ねえよ。あせつて労働基準監督署に電話したら、戦闘中の死傷には
労災はおれないだ。おまけに保険屋からわざわざ電話があつて、
戦死には保険金はおろさない。念を押された。会社は俺が死ねばい
いと思つて。このままじゃあ犬死にだあ」
「んだよ。このままじゃあ犬死にだあ」

「この人泣き上戸だ」鈴木があきれ果てている。

「いや酒乱かも知れない」

「ああらいつもなのよ。一仕事終わって気に入らないことがあるとうちにきて愚痴こぼすの。酔っぱらっていても一歩店の外に出たらけろつとしてるのよ。だいじょうぶなの」

「そのとおりで。どんなに酔っても頭のある部分はいつも醒めていて自分が何を言っているのか冷静に判断している。ビールはとつくなくなつていたのだ。いつそ我を忘れるくらい酔えた方がどんなにましか。」

「どいつもこいつも寄ってたかって俺の人生食い物にして土足で踏みにじりやがって。俺だれも許さないからな」

「きつと俺の後に続いて出向と称してどんだん軍隊に送り込まれる人間の行列ができているに違いない。」

「勘定を払っておぼさんに見送られて店の外に一歩出たとたん、いつものようにあつけなく酔いがさめた。」

「それじゃ基地に電話して車を回してもらおうか」

鈴木がケータイを取り出そうとしたときに気がついた。

「いや。よく考えたら電話は信用できない。あちら側に盗聴されてこっちの車両の振りをして迎えに来るかも知れない。それに木村さんの顔を見て、気の迷いで木村さんに乗せたままあっち側に寝返る」

やつがないとも限らない。車を借りる」

「ちやんと判断力が残っている」

「すごい」
駅前を八時間借りたが、レンタカー会社に行つて、小型の乗用車を八時間借りたが、クレジットカードを使うわけにはいかない。

「保証金三倍入れるから現金で貸して」

「はい承知しました。念のため免許証を拝見できますか」

昔から顔なじみの担当者、こんなことをしなくてもいいのに変なことをするなあとでも言いたそうな顔で、伝票を書いた。クレジットカード使わなくても、俺の面は割れているのここまでする意味があるのかと、ふと疑問に思った。

「飲酒運転で警察につかまったらやばくないか」

「その時は木村さんが一緒に写真とってやるか握手でもしてやればいい。今時の警官そんなもんだ」

「そこまで言うかなあ」

もう知らない。
基地に向かう車の中で俺はもうこのエピソードが早く終わつてくれないかと願いながら黙って運転をした。
「あのさ、出合いは縁だつて言うから頼みたいことがあるんだけど」

「なんだよ」
「木村さんの参加した作戦の詳細、聞かせてもらえないかな。基地に帰ったらしばらく休暇もらえるだろうから」
「そんなことしてどうするの」
「俺の昔のサバイバルゲーム仲間でゲームソフトの会社をやっているやつがいるの。そこは昔からフライトシミュレーターが得意なの。木村さんが参加した作戦を再現できるゲームソフトを出したら売れると思うんだよ。そしたらライセンス料で稼げる」
「フライトシミュレーターって操縦の訓練用に使うやつか」
「あれほど高度じゃないけれど今のゲーム機ってかなりの臨場感が出るんだ」
「作戦の記録ならば大体公開されているよ」
「でもさ、たとえ木村機のエンジンの吹き上がり方とか、本人でなければわからないことってあるじゃない。そういったことだけでも類似の商品と差別化できるんだ。それにパッケージに木村少佐監修って入れるだけでも売れるに決まっているんだよね」
「うんいいね。それなら公開されていない作戦記録のビデオも借り出してやろうか。それにね、あの機体は超音速域から亜音速に移るとき時々エンジンがストールするんだよ」

「そうそう。そういうことがリアリティと説得力を付加するんだよね」

後ろの座席で馬鹿な話をしている二人は、俺の異常心理が伝染したのかそれともようやく帰投できると思っただけで徹底的に安心して気がゆるんでしまったのか、急激に職業意識を喪失していくようだった。

「それとさ、これだけ有名になって明日の新聞に、『エースの木村奇跡の生還』なんて大見出しで載ったら、CMの話も来ると思うんだ」

「そうだね」

「表向きは広報を通じてやるにしても、事実上のマネージメントは俺にやらせてくれないかな。マージンぼらないから。根回ししておいしい話持つてくるようにする」

「楽しみだなあ」

「あんなあ。どうせあんたらには二度と会わないだろうから最後に忠告しておくけれど、職業人がそんなこと考えるようになったらおしまいだぜ。二人ともきつとろくな死に方しないぞ」

「うん。それはいいの。死を自分の死として主体的に体験できればかまわないの。名誉の戦死でもたれ死にでも死は死だから。俺たちそういう風に教育されているの」

何を考えているんだこいつら。
基地のゲートの四百メートルほど手前で車を止めた。鈴木と木村はきよとんとしている。
「なんでこんなところで止めるの」
「ここで降りてあとは歩いて帰ってくれ」
「そんなこと言つてあんたはどうするつもりなんだ」
「俺もうこんなことにつき合いたくない。やめる。木村さんを帰投させたのは鈴木さんの手柄でいい」
「やめるつて、ここまで来て最後をきちんと終わらせなければ仕事をしたことになるよ」木村はあくまでもクールなのだ。
「うん。それにここまでこられたのはあんたのおかげなんだよ。さつきはあんなこと言つて悪かった。俺あんたの状況対応能力だけは高く評価する。その点については尊敬しているんだ」
「いつそのこと出向なんて中途半端な立場じゃなくて正式に軍隊に入つた方がましじゃないかな。あんたなら新卒のろくでもない奴らよりよほど厚遇されると思う」
「いやだね。取引先の会社を勝手に辞めた人間を軍隊が歓迎してくるはずがない。それに木村さんを連れて帰つたら最初のうちはちやほやされるだろうけれど、それだけできるんだから今度は戦闘銃もつて戦場に出るなんていわれかねない。俺、最後の信条としてそんな

な殺し合いだけにはしたくない。そんなことになったら今度は俺がメ
ディアに喰い殺される番だ。それこそ死が自分の死でなくなっちゃ
うじゃないの。死に方くらいは自分で選びたい」
「そんなこと言うけどさ、このままじゃあんだ戦闘中行方不明のま
まになっちゃうよ。俺たちはあんだがずらかったなんてたれ込まな
いけど」
「そしたらそのうち戸籍がなくなる。はした金の弔慰金が出るくら
いしかないよ。職失つたら食べていけないよ」
「かまわないよ。かみさんの実家が味噌屋やっているんだ。小さい
けれど何代も続いた老舗で跡継ぎがいなくて困っていたんだ。前か
ら家業を継いでくれたらかみさんに言われていて、味噌は苦手だっ
て逃げ回っていたんだけれど、こんな世の中だと自分の体動かして
毎日人様の口に入るものを作って地道に暮らしていく方がよほどま
ともだ。今度のことで俺のように決心がついた。俺、家に帰る」
「その方がいいかもしれないね。あんだの生き方に口は出せないも
のね」
「そうだ。五枚借りていたのを忘れていた。返すチャンスがない」
「あれはもういい。あげる」
「悪いね。じゃあこれ渡しておく。風呂屋の領収書。日付も金額も
宛名もはいつていないやつ。勤め人辞めて自営業になるなら役に立

つと思う」
「うん。ありがとう」
「それじゃ元気でね」
「じゃあね」
「あそうだ。あのさあ」
「ん？何」
「最後にきいておきたいことがあるんだけれど」
「俺も」
「何？」
「あんたの名前、何ていうの。俺たちは名乗ったけれど、あんただけ自分の名前をいわなかったよね」
「そうそう。それってフェアじゃないよな」
「それとも名乗らないままにしておいて何かのアドバンテージにするつもりだったの？」
「増岡久男」
「え？」
「ますおかひさお！」
「え？ひさおってどういう字書くの？」
「久しい男」

「ええ。それじゃあ」

「マスをかくおとこ！？」

「言うな！」

「ああごめん。悪かった悪かった」

下車した二人の行方を見届けることもせず俺は方向を転じて車を駅に向かつて走らせた。

赤い派手なスポーツカーがとんでもない速度で走ってくるのとすれ違った。後ろの方で、どすんどすんど、何かがぶつかるような大きな音がして、動物が殺されるときのような大きな断末魔の叫び声が聞こえたが、あれは何だったのだろうか。

燃料計が満タンのまま動いていないのを確かめて満タン返しの振りを決め込むことにしてからレンタカー会社に車を返しに行った。振算を終えて返してもらった現金の中からおおきなのを三枚出した。が、言ってみたら、

「あのさあ。さっきの伝票なんだけどさあ」

「ああいいですよ」

彼はにっこりと微笑んでその金を受け取って、伝票から何かから俺がここで自動車を借りた痕跡をことごとくシュレッダーにかけて、俺にウインクした。気が利きすぎていて気持ち悪い。俺は店を出たあとだ

った。ほんとうに知恵はあとからやってくる。しかし乗り逃げしたところでもガソリンスタンドでガソリンを売ってくれるかもなく、そもそもどこのガソリンスタンドがまだ営業しているのかもわからぬ。必ず足がつく。それに運転する気力なんかも残っていない。木村に多機能腕時計を貸したままになって、時刻と曜日くらいしか見た。あんなものどうでもよくなっていた。時刻と曜日くらいしか見ないのに、どうしてあんな値段の高いやたらとたくさん機能が付いた時計なんか買ったんだろう。親子三人が一週間は楽に食べられるくらい値段の高い、ゴム製のおもちゃみたいな腕時計。ここまでするともはやクレジットカードは一切使えないので、しかたなく列車の切符をとにかく動いている範囲まで現金で買って、列車に乗り待合室で仮眠しバスに乗りえんと歩きまた列車に乗り、そんなことを何度か繰り返して、家の最寄りの駅までたどり着くの。飲まず食わずで三日かかった。昔はそこからバスで二十分乗って停留所から歩いて十五分かけてマンションに帰っていたのだが、バスが走っている様子もなく財布の中には硬貨が三枚残っているだけだった。最後の道のりを歩くはめになった。一応家に電話を入れておこうかと思つてケータイを歩くはめになった。ケータイは一発で居場所がわかる、か。ここまで来て軍に身柄を拘束さ

れてたまるか。

懐かしい家の前についたときはもう深夜近かった。ドアのチャイムを鳴らした。かみさんがドアを開けてまん丸い顔を出した。

「ただいま」

「あらあ。お帰りなさいい。電話かけてくれればよかったのにい。夕飯の残りしかないわよお。お風呂も冷めちやったわよお」

「飯が食べたい。それと風呂沸かしなおしてくれるかな」

「はいはい」

「あつこは？」

「もう寝てるわよお。あした学校の遠足なのお。本物の兵隊さんに会えるってえ。楽しみにしてるのお。あたしも早起きしなきゃいけないしい」

「それじゃ今夜求めるのは無理だな。家業の話も明日することにしてよう。食事を終えてから俺はぼんやりとテレビの戦争報道の画面を眺めていた。」

「お風呂わいたわよお」

俺は体を洗うのもそこそこに湯船にどっぷりとつかった。ふう。やっぱり我が家がいちばんいいなあ。

※この話はフィクションです。あり登場人物の氏名、地名などはすべてあくまでも架空のものです。